

「ギター文献」について

今 西 順 吉

一 はじめに

『バガヴァッド・ギター』がインド思想史上極めて重要な文献であることは改めて言うまでもない。『ギター』の重要性とは、文献それ自体が非常に重要であるとともに、後代に及ぼした影響もまた極めて大きいという二つの側面がある。僅かに七〇〇頌から成る小品でありながら、このような思想史的意義を有する文献としては、仏教の『ダンマ・パダ』が比較されうるであろうが、『ギター』の意義は『ダンマ・パダ』に優るとも劣らないであろう。ここでは直接『ギター』にかかわりを持つ文献を「ギター文献」と呼ぶことにしたい。後に述べるように、これまでに「ギター」(Gita)という呼称をもつ一群の文献を指して「ギター文学」(Gita literature)と呼んだり、『バガヴァッド・ギター』を模倣した作品を「偽似ギター文学」(pseudo-Gita literature)と呼ぶ例はあったが、注釈文献をも含めて、広く

『ギター』にかかわりをもつ作品全体を「ギター文献」と呼ぶことにしたい^①。以下にその概略を述べよう。

二 『ギター』の歴史的位置

『ギター』が折衷的であることはつとに周知の所であるが、『ギター』の折衷性は事柄の一面に過ぎない。『ギター』は単に様々な思想的諸要素を同居させているのではなく、より高次の立場に立つてそれらの諸要素を統一的・総合的に位置づけようとしている。『ギター』が優れた宗教文献として今日までインド人の精神生活の糧となりえているのは、『ギター』自身のかかる思想的・宗教的な根源性に求められるのであって、それが折衷的に内に含んでいる個々の要素がもつ意味によるのではないであろう。

さて、『ギター』に含まれている思想的な要素としては祭の思想、ウパニシャッド思想、仏教、サーンキヤ、ヨーガ等の思想が挙げられる。これらの思想は『ギター』に先行

するか、あるいは『ギーター』成立当時の思想と解され、結局、『ギーター』は成立の時点におけるインド思想史のエッセンスをそっくり吸収している、と言うことが出来る。

それらの思想的要素を総合する『ギーター』の思想的な立場がヴィシュヌ神をバガヴァットと呼んで崇拜するヒンドゥー教の一派の思想であることもまた言うまでもない。問題は、ヒンドゥー教の一派の聖典が何故インド思想史上において比類ない意義を担うことが出来たか、という点にあるであろう。このことは先述の『ダンマ・パダ』が、仏教成立当時の思想界とは非常に多くのものを共有しながら、『ダンマ・パダ』それ自体としては仏教の枠の外には殆ど踏み出さなかったことを思うならば、『ギーター』の特質が如実に知られるであろう。この問題を考える上で、『プラフマ・スートラ』の役割は無視できないであろう。

ヴェーダーンタ学派は天啓聖典 (*śruti*) を第一義的に重視し、聖伝文学 (*smṛti*) などとはそれと矛盾しない限りにおいてその意義が承認される、という原則を建てている。例えばサーンキヤ学派やヨーガ学派の思想を論破する際には、これらの学派の思想的根拠が天啓聖典ではなくて聖伝文学であることを指摘して、このことに重要な欠点を見出そうとしている。ところが『ギーター』も本来は聖伝文学に含まれるにもかかわらず、『プラフマ・スートラ』は自派の学説の正当性を保証

するものとして『ギーター』を積極的に援用している。さらにシャンカラがその注釈書において『ギーター』を権威あるものとして引用する度合は決して少なくない。ヴェーダーンタ学派が『ギーター』を、『ウパニシャッド』、『プラフマ・スートラ』と並ぶ三種の権威ある書 (*prashnatraya*) として高く評価していることの実際の姿をここにも読み取ることが出来る。本来ヒンドゥー教の聖典であった『ギーター』が、*smṛti* としての資格のままにこのようにして正統派バラモンによってその権威を承認されるに至ったのであろう。さらに写本によつては『ギーター』自身「ウパニシャッド」と呼称していることがあり、*smṛti* である聖典が *śruti* であることを自称しようとする意図の背景はこのように理解されうであらう。

三 『ギーター』の「神」

『ギーター』が元来ヒンドゥー教の聖典であるということの最も本質的な意味は、ヒンドゥー教の神観念がその中に表明されていることに他ならない。これは『ギーター』の不可欠な特質として考えるべき問題である。そして『ギーター』の神が、その中に取り入れられている様々な思想を総合するものである。『ギーター』は折衷的であるにもかかわらず、本質的に総合的・統一的であると見られる根拠は、それが説

いている神の觀念にあると言ってよい。今ここではその点について簡潔に、(一)神はブラフマンと同一である、(二)仏教の説く涅槃はブラフマンにおける涅槃(brahma-nirvāṇa)に他ならない、(三)神は純粹精神と根本原質との両者の根源たるものである、という三点を指摘するにとどめておきたい。そして『ギーター』はかかる神に対する専心・専念を説く。しかしその専念は所謂ヨーガ・瞑想ではなく、日常的な具体的実践を基礎づけるものである。

そこでヒンドゥー教としての側面を明瞭に示す例として次の詩を挙げる事が出来る。

わがために行為を行い、われに専心し、われに信愛を捧げ、執着を離れ、万物に対して憎悪なきものはわれに來たる、パーンドゥの子よ。(M. 55)

この詩はシャンカラによつて『ギーター』全体の精髓たる意義(sarvasya gṛhāsāstrasya sarabhatō 'rtho)を説くものであるという高い評価を与えられている。不二元論の大成者が『ギーター』の神觀念の本質に対してこのように深い共感的理解を持っていたことは注目される。

しかし、思想的見地からは次の詩に注目したい。

ブラフマンは献供である。ブラフマンは供物である。ブラフマンなる祭火の中に、ブラフマンによつて捧げられる。ブラフマンなる行為の三昧に住する者によつてブラフマンは到達さるべきで

ある。

brahmā 'rpaṇap brahma havir
brahmā'gnau brahmaṇā butam |
brahmai 'va tena gantavyam
brahma-karma-samādhina || IV, 24.

ここでは一切がブラフマンであるという思想を具体的に述べている。すなわち、祭の行為を成立させている要素である祭火(agni)・供物(havis)・祭祀を執行する者とその心的状態(brahma-karma-samādhī)・献供(carpaṇa)・そして「捧げる」(buta)という行為、そのすべてがブラフマンであり、従つて現実に行われている祭祀は、本質的にはブラフマンの自己活動であり、自ら行為して自己に還歸する運動に他ならない。梵我一如の思想を祭祀の実行という場面を借りて極めて具体的に説いたものと言いうるであろう。しかもこの場合の祭祀は、『ギーター』の行為論からすれば、行為一般の具体例と見なしてよいから、一般に行為はこのように為さるべきであることを説いているのである。行為という具体的な人間存在の「場」について、それを成り立たせている諸要因がすべてブラフマンに他ならないという思想は、容易に般若經の説く「三輪清淨」の思想を想起させるであろう。もとより般若經においてブラフマンの位置を占めているのは「空」であるが、思想構造としては極めて著しい相似を示している。

以上のように、『ギーター』の神は梵我一如も涅槃も、また二元論もその中に包み込んで、しかもその実践論によってインドの現実に眼を向けさせようとする。つまり、『ギーター』はヴェーダ以来のインドの宗教史・思想史を包括的な形で取り組んで、それをヒンドゥー教の思想、すなわち新たな時代精神によって基礎づけようとしているのである。しかもその成果が正統バラモンによっても承認されて、正式に受け入れられたということは、非常に大きな意味を持つであろう。サーンキヤ、ヨーガ、仏教などは正統派の思想に対する改革的な思想であったが、その成果が一方では正統派によって摂取・吸収されながら、他方では特に仏教の歴史において端的に見られるように、反正統派（*asāhika*）の烙印のもとに排除・排斥の努力が継続的になされることになった。

このように考察してくるならば、『ギーター』が極めて豊かなインド思想史・宗教史の精髓をその中に盛り込みながら、古代から中世への大きな橋渡しの役割を果たしていることは容易に見て取れるであろう。

四 読誦聖典としての『ギーター』

『ギーター』がどのように読まれたかを考える場合に、最も印象深いのはカシュミールの王アヴァンティヴァルマンの例であろう。王はその臨終（八八三年）に際し全『ギーター』

の唱誦を聞き終わって、ヴィシュヌの神居を憶念しつつ喜んで世を去った、⁽¹⁰⁾ と言う。またアラビアの旅行家アルベール・ニー（一〇三〇）が『ギーター』をよく知っていたことも周知の通りである。⁽¹¹⁾ これは現代におけるティラクやガンディ、あるいはヨーロッパにおけるフンボルトなどの感動・感銘に連なりうるものである。そして実際にも『ギーター』は読誦聖典としての取扱を受けていた。今日われわれは七〇〇頌をもつて『ギーター』と理解しているが、『ギーター』が読誦聖典として単独で刊行されている場合には、付属文献を伴っている。これらは厳密な意味での『ギーター』からは一般に除かれており、従って数ある『ギーター』の版本や研究文献においては殆ど無視されているが、『マハーバータ』においては『ギーター』の前に位置するものと、『ギーター』の後に置かれるものとの二種類の文獻がある。『ギーター』の前に置かれるのは次のものである。

Gītāprāsasti

Gītāmahatmya

ヘルヴァルカルはこれらについて、*Dhyāna* を含む「タントラ的な序」(Tantric prologue)と呼んでいるが、⁽¹²⁾ その内容は *karanyāsa*, *aṅganyāsa*, *dhyāna* から成っている。もっとも、インドにおける読誦聖典としての流布本では初めの二つが *karanyāsa* の名のもとに一括され(“*atha karanyāsaḥ*” 但し

その内部では以上の二つに分けられている)、“*arha dhyanam*”がこれに続く形式のものがある。日本においても、高島米峰氏が大正七年に丙午出版社から「翻刻出版」したテキストでは、“*karāḍiṇyāsaṇ*”と *dhyanam* とを見出しに出している。

これらはカシュミール写本に見られるものであることがブーナ校訂本によって知られるが、現存写本の上ではそうであるにしても、現状では民衆の間での流布本の形態を示すものと言ってよいようである。

またこのインドの流布本も高島本も、さらに最初に“*Gita-mahatmyam*”をもつ。前者では七偈から成り、後者では *Varāḥapurāṇa* の“*Gita-mahatmyam*”であることを明記している。しかしこれらの偈の伝承・相互関係はかなり込み入っている。

また『ギーター』の後におかれるのは次のものである。

Gitasara (§1, 2 含まれる) 校訂本 Appendix I, no. 3.

これには注釈書がついているが、写本 S₁ は両者を有し、しかもその注釈者を *Śrīdhara* とし、注釈書の名称を *Brāhmaṇasambodhin* としている。K₂ は *Gitasara* のみを有する。

もう一つの *Gitasāra* はこれと共通する詩を含むが、しかし別の作品である。通常それは *Om-kara-(or prajavata)-mahatmya* と呼ばれる。これらは『マハーバーラタ』のシャラーダー写本、カシュミール写本において『ギーター』の直後に

「ギーター文献」について(今 西)

置かれ、そのコロフォンにおいて、他の章と同様に、『ギーターサーラ』という章名をもつ一つの章として扱われている。

これらの文献の内容についてここに述べる余裕はないが、このような文献を見ると、それらが『ギーター』を独立の聖典として崇拝し、その意義を讀めるために作られた付属文献であることが明瞭である。古い時代において実際に『ギーター』がどのように読まれ、またいかなる人間的欲求あるいは祈願に応えるものとして読まれていたか、その読まれ方の実状は残念ながら伺い知ることが極めて困難である。もっともこの点は単に『ギーター』に限らず、むしろインドの常と云っても過言ではないが、これらの付属文献は少なくとも『ギーター』を聖典として崇い読誦した、『ギーター』崇拝の一端を示すものと言えるであろう。

五 注釈書

さて、実際に『ギーター』がどの程度に読まれてきたかということは、『ギーター』がどの程度に参照されていたか、という問題と、どれだけの注釈書が書かれたか、という二つの側面から考えることが出来るであろう。前者については今は前述の『ブラフマ・スートラ』およびシャンカラの注釈にとどめて、後者についてだけ述べておくことにしたい。

『ギーター』の注釈書としては二種類がある。『ギーター』は『マハーバーラタ』に収められているから、『マハーバーラタ』全体に対する注釈書は当然『ギーター』に対する注釈も含むことになる。そこで第一類は『ギーター』そのものに対する関心のもとに書かれた注釈書である。ここには注釈作者の思想的立場が表明されており、通常『ギーター』の注釈書と言えはこれを指している。そして第二類が『マハーバーラタ』の注釈書に含まれるものであることになる。

第一類の、『ギーター』に対する注釈書の作者の多くは同時に『ブラフマ・スートラ』に対する注釈書も著している。シャンカラ以前にも注釈書の存在したことはシャンカラ自身が明記しているが、現存最古の注釈書はシャンカラの作であり、以後ヒンドウ教のあらゆる宗派の立場から多数の注釈書ならびにそれに対する複注が著されている。⁽⁸¹⁾これについてはすでに周知であるから、ここには省略しよう。

次に第二類の、『マハーバーラタ』全体に対する注釈書における『ギーター』部分であるが、これについてはプーナ校訂本の解説に詳細が記されている。最もよく知られているのが Nīlakaṇṭha の注釈書であるが、他に Arjunamīśra, Caturbhujamīśra, Vādirāja の著があり、その他にもほとんど重視されない注釈書が五点ほどある。なお『マハーバーラタ』の注釈書としては現存最古のものとして Devabodha の作品が

あるが、『ギーター』の部分を欠いていると言う。

六 要約書および模倣作品

『ギーター』の精髓を要約した作品としては Yāmuna : *Gītāhasaṅgraha* ⁽⁸²⁾ があるが、そのほかでは『マハーバーラタ』自体の要約書としても存在する。すなわち Kṣemendra: *Bhāratamāñjarī* (Kāvyamālā, no. 64) では『ギーター』部分は VI, 28-174 の一四七詩が充てられているが、『ギーター』の重要な思想を説く詩をほぼそのまま『ギーター』から引用している場合も見られる。これに反して Amaraśāstra: *Balarājanīya* (Kāvyamālā, no. 45) では『ギーター』には僅かに四詩を充てるのみである。

以上の他に、それ自体は独立の作品でありながら、『ギーター』に依存して作られていることが明瞭であるものが少なくない。『マハーバーラタ』に含まれる *Harigītā* (XII, 336, 49 Crit. ed.) には『ギーター』への言及があるが、『ギーター』を意識して作られているものとして U. C. Bhattacharjee によると、つぎのような “Gītā” がある。⁽⁸³⁾ まず『マハーバーラタ』に含まれているものとしては、

1. *Uttarāyaṇa* G. xii, 90-91
2. *Vamadeva* G. xii, 92-94
3. *Rādhā* G. xii, 125-128

4. *Śaṃbha* G. xii, 176
 5. *Manikī* G. xii, 177
 6. *Bodhya* G. xii, 178
 7. *Vicakhu* G. xii, 264
 8. *Harita* G. xii, 277
 9. *Vṛtra* G. xii, 278
 10. *Paraśara* G. xii, 290-298
 11. *Haṃsa* G. xii, 299
 12. *Amugita*. xiv, 16-19
 13. *Bṛhmaṇa* G. xiv, 20-34
- 「ヒートナ」を意味する「ヒート」は単独の作品として、
1. *Isvara* G., *Karma* P. ii, 1-11
 2. *Vyāsa* G., *Karma* P. ii, 12-30
 3. *Rama* G.
 4. *Ganeśa* G., *Ganeśa* P. ii, 138-148
 5. *Śiva* G., *Padma* P. ?
 6. *Devī* G., *Devbhāgavata* vii, 32-40
 7. *Kapila* G., *Śrīmadbhāgavata* iii, 25-33
 8. *Aśvaśakra* G.
 9. *Avadhata* G.
 10. *Avadhata* G. no. 2., *Śrīmadbhāgavata* xi, 7-9
 11. *Sarya* G.

「キーター文獻」について (今 西)

12. *Yama* G., *Viṣṇu* P. iii, 7
 13. *Yama* G. no. 2., *Nṛsiṃha* P. viii
 14. *Yama* G. no. 3., *Agni* P. ch. 382
 15. *Haṃsa* G., *Bhāgavata* xi, 13
 16. *Pāṇḍava* G.
 17. *Brahma* G., *Skanda* P. ?
 18. *Brahma* G. no. 2., *Yogaśāstra* v, 2, 172-182
 19. *Siddha* G., *Yogaśāstra* v, 8
 20. *Pitṛ* G., *Varaha* P. ch. 13
 21. *Agastya* G., *Varaha* P. ch. 50-53
 22. *Rudra* G., *Varaha* P. ch. 70-71
- 『キーター』を模倣した作品としてこれほど多くは、
 「ヒート」に『キーター』との関連を持つ記述一般としてお
 らに多くの文獻がある。⁽³⁾

Bhattacharjee はこれらの諸“Gītā”が“brahma-vidyā”
 なわらウペンニシャットと深い関係にあることを指摘して、
 が、その場合のウペンニシャットは『カタ・ウペンニシャット』
 など『キーター』においても深い関係にあるものであること
 は注意されなければならない。そして『Amugita』などの二編
 (上記12 & 13)を別とすれば、これらの“Gītā”が『ブー
 ーラタ』では主として第一二巻に集められていることも興味
 深い。そしてそれ以外の作品はブラーナに含まれるか単独と

いうことになる。

ここでは以上に挙げられていない“*Āryama-upakhyāna*”について簡単に述べてみよう。これは *Yogavāsishtha* の第六巻 (*Nirvāṇaparakāṇa*) の第五章から五八章までであるが、カルマルカル(6)によると、全二五四詩のうち『ギーター』と完全に一致する詩は、二行とも一致が二一例、一行だけの一致が一四例指摘されている。しかしこれは「詩」として一致する場合のみであって、それ以外にも類似する表現・思想ということになればるかに多数見出される。『ギーター』が模範となっていることの著しい一例である。

七 むすび

以上においては「ギーター文献」のいわば外延を述べたにすぎないが、それだけでも興味ある問題が出て来るであろう。『ギーター』という文献をいかなる立場から読むかによってその読み方は自ずから異なっている。シャンカラ等のように、ウパニシャッドの立場から「ギーター」を援用することも出来るが、また『ギーター』とも共通するヒンドゥー教の立場から読むことも出来る。さらには『ギーター』から出発して、『ギーター』を要約したり、あるいは『ギーター』によっては充分には満たされないものを補う形で新しく模倣的な作品を作ることが可能であったと言いうる。『ギーター』

がインド思想史において幅広く読み継がれたのは、『ギーター』自身が総合して内包しているヴェーダ以来の思想、特にウパニシャッド思想と、ヒンドゥー教の思想とが、その読者自身のあらゆる立場を超えて、共感を呼び覚ますことを可能にしたからであろう。

『ギーター』は折衷的であると言われるが、初めにも述べたように、それは単なる寄せ集めではなく、インド思想史の精髓を吸収しながら、それに新しい命を吹き込んだものと言っても過言ではないであろう。

1 『ギーター』の注釈書（ならびに若干の綱要書）を *Gita literature* と呼ぶ例もある。Dasgupta: *A History of Indian Philosophy*, vol. 2, Cambridge Univ. Press, 1932(repr. 1965) pp. 437f. 「疑似ギーター文献」(pseudo-Gita) の呼称にについては後に述べる。ここではそれをも含めた一群の文献を *Gita-literature* と呼ぶこととする。

2 詳細については別に発表を予定しているが、その概略については辻直四郎『バガヴァッド・ギーター—古代印度宗教詩—』（刀江書院、昭和二十五年）『辻直四郎著作集』第三巻）二一頁以下、同『バガヴァッド・ギーター』（インド古典叢書、講談社、昭和五十五年）三二五頁以下参照。なお『ギーター』と対応する諸文献の一覧については Zaehner: *The Bhagavad gita, With a Commentary based on the original sources*, Oxford 1969, pp. 465ff 参照。

3 See *Brahma-sutra*, II, 1, 1-3. 中村元『ブラフマ・スートラの哲学』（岩波書店、昭和二十六年）一八〇—一八一頁、四一

○頁以下参照。

4 『フランド・ノートラ』自体が次の『キーター』に言及してゐると思はれる。BG 6, 11(BS 4, 1, 10), 8, 23-26(4, 2, 21), 15, 7(2, 3, 45), 15, 12(1, 3, 23), 18, 61(1, 2, 6)。中村・前掲書、三九七頁参照。

5 前注に挙げた『フランド・ノートラ』が言及すると思われるものは、『キーター』に次のように述べられてゐる。

BG 2, 24(BS 3, 2, 37), 2, 25(2, 1, 6), 2, 25(3, 2, 23), 2, 33(4, 1, 18), 2, 49(4, 1, 18), 2, 54(1, 1, 4), 2, 54(1, 4, 22), 3, 17(4, 1, 2), 3, 35(3, 3, 40), 4, 11(2, 1, 34), 4, 37(3, 3, 32), 5, 14(2, 1, 14), 5, 15(2, 1, 14), 5, 17(3, 4, 20), 6, 1(3, 4, 34), 6, 11(4, 1, 10), 6, 37(3, 4, 51), 6, 40(3, 4, 51), 6, 43(3, 4, 51), 6, 45(3, 4, 38), 6, 45(3, 4, 51), 7, 6(2, 1, 1), 7, 19(1, 4, 22), 7, 21(3, 2, 41), 8, 6(1, 1, 11; 3, 3, 59; 4, 1, 12), 8, 10(4, 1, 12), 8, 23(4, 2, 20), 8, 23(4, 2, 21), 8, 24(1, 2, 16; 4, 2, 21), 8, 25(4, 2, 21), 8, 26(3, 3, 21), 10, 2(2, 1, 6), 10, 4(2, 3, 10), 10, 5(2, 3, 10), 10, 37(3, 4, 47), 10, 42(1, 1, 26), 10, 41(1, 1, 11; 1, 1, 20), 13, 1(1, 1, 12), 13, 2(1, 2, 6; 1, 4, 22), 13, 12(3, 2, 17), 13, 13(1, 2, 1), 13, 27(1, 4, 22), 13, 31(1, 3, 19), 14, 17(1, 1, 5), 15, 3(2, 1, 36), 15, 6(1, 3, 23; 4, 4, 20), 15, 12(1, 3, 23), 15, 20(1, 1, 4), 18, 61(1, 2, 6; 2, 1, 14)。Vergl. P. Deussen: *Das System des Vedānta*. Leipzig. 1889. S. 515-525

6 前注に挙げた『フランド・ノートラ』に『キーター』の次の語句が用いられてゐる。"smṛteś ca." (1, 2, 6); "api ca smṛtyate." (1, 3, 23; 2, 3, 45); "smaranī ca." (4, 1, 10); "yoginah pratisṁṛyate, smṛte caite." (4, 2, 21) など。この語句は、前掲の『キーター文獻』に引かれてゐる。

「キーター文獻」に引かれてゐる (今)

「キーター」が smṛti であることが示してゐる。

7 『キーター』がもとめとウパニシャッドとして承認されてゐたならば、このような事態は起りえなかつたであらう。なお『キーター』が初めから『フランド・ノートラ』に属してゐたのではなく、後から『フランド・ノートラ』に挿入されたであらうことについては、see Georg von Simson: "Die Einschaltung der Bhagavadgītā im Bhīṣmaparvan des Mahābhārata," III vol. 11, 1969, pp. 159-174.

8 前注に挙げた『フランド・ノートラ』の「全タニニヤム」の精髄が規定する正しき見解 (samyagdarsanam sarvavedānastāvhitam) と述べてゐる。この語は「一切の法を捨離して」われのみ帰依せよ。われは汝を一切の罪惡から解放しよ。憂へることをなすな。」と云ふのが、この「キーター」に於いては、自ら説いた部分 (2, 12-18, 66) の最後と謂はる「終極」(cārama-śloka) と述べてゐる。

9 この問題に関する考察は別稿に於いて發表する予定である。Kahana: *Rajatarāṅginī*. V. 125. 本「前掲書」六頁。Winternitz: *A History of Indian Literature*, vol. 1, pt. 2. 2nd ed. Univ. of Calcutta, 1969. p. 374.

11 フランド・ノートラに於ける著作の中心として『キーター』に言及してゐる。E. C. Sachau, tr.: *Alberuni's India*. Winternitz, *op. cit.*, p. 375. 本「同書」六頁。

12 Winternitz, *op. cit.*, p. 375.

13 Śhrīpad Krishna Belvalkar: *The Bhagavadgītā, being Reprint of Relevant parts of Bhīṣmaparvan from the B. O. R. Institute Edition of the Mahābhārata*, p. XVI.

14 バラーナシの書店では、この聖典が陳列販売されてゐる。

